

# お茶うけ 第23話

## 伊勢佐木町商店街

横浜市中区の馬車道から吉田橋を渡ると伊勢佐木町商店街の入り口です。週日の午後、イセザキ・モールの並木を歩いて、伊勢佐木町の1丁目から7丁目までの約1200mをゆっくり歩きました。

今から約150年程前、1859年(安政6年)の横浜開港によって誕生した横浜の町は、1945年(昭和20年)までの約100年間に、3つの大災害を経験しています。1866年(慶応2年)に関内居留地を焼き尽くした豚屋火事、1923年(大正12年)の横浜市内世帯の95.5%が被災した関東大震災、1945年(昭和20年)の市内面積の42%が焼失した横浜大空襲です。その度に横浜の人々は復興に力を注ぎ、現在の日本有数の大都市を作り上げました。



横浜を代表するこの伊勢佐木町商店街も、これらの災害と深く関わっております。

まず、豚屋火事が伊勢佐木町の誕生と成長のきっかけを作りました。居留地において、豚屋火事により被災した芝居小屋や遊廓が、今の伊勢佐木町やその裏手に移転した頃から、歓楽街に向かう人の流れが増えて店ができ商店街の形ができました。伊勢佐木町商店街の発展は目ざましく、明治の末期(1910年頃)には、東京の浅草、大阪の千日前をしのぐ日本一の街と言われるほどでした。この頃から関東大震災までは、文明開化の先端をゆく商店街として、芝居小屋(新派劇)、映画館(洋画封切館)、呉服屋、食堂、お菓子屋などが軒を連ねました。

次の関東大震災では、当時建ったばかりの百貨店のビルが陥没して傾くなど、大きな被害を受けましたが、国内外の救援にも助けられて復興が思ったより早く進みました。また、戦後の接收とは逆に、震災を契機に明治以来の関内の外国人居留地が、1925年(大正14年)に返還されて商圈が広がり、さらに震災による大量の瓦礫や残土を利用して山下海岸を埋め立て、1930年(昭和5年)に臨海公園・山下公園が開園し、イセプラ(伊勢佐木町を散策すること)の後は、馬車道を通って港見物をという観光コースができたことなどが、プラス要因となりました。また1丁目から7丁目までが、それぞれ特徴のある商品・店舗が集まった複数のゾーンを形成し、お客のニーズに対応していました。

しかし、戦後は戦災の大きな痛手に加えて、占領軍による長期間の接收のため、伊勢佐木町の復興はなかなか進みませんでした。特に町の中心の大型ビル(野沢屋(現横浜松阪屋)、有隣堂、不二屋、など)が接收され、返還後の本格的復旧が始まったのは、1955年(昭和30年)頃からです。

一方、強力なライバルが生まれました。少し離れた横浜駅西口商店街の開発です。これは、横浜の主力商店街の復興が遅れ、市民が東京で買い物をするに危機感を抱いた横浜市は、「浜っ子の買い物は横浜で！」のキャンペーンとともに、近代型ショッピングセンターを横浜駅西口に開発することを計画したのです。1956年(昭和31年)に西口「名店街」が、1959年(昭和34年)に横浜高島屋がそれぞれオープンしました。現在は、横浜駅東西の大型ショッピングセンターを結ぶ幅36mの駅構内の自由通路は、朝から夜まで人の波が絶えることはありません。

接收されたビルが町にあっても、伊勢佐木町商店街の人々は復興の努力を続けました。

1950年(昭和25年)に、ネオンアーチやネオンポールを設置しました。1953年(昭和28年)には、以後横浜の初夏の風物詩として定着する、第1回の国際仮装行列のパレードが、伊勢佐木町の通りを行進しました。さらに1978年(昭和53年)には、歩行者だけの木陰のある道路(モール)であるイセザキ・モールを完成させました。

久しぶりに伊勢佐木町商店街を歩き通して、懐かしい名前や店舗を見つけましたが、途中からは人の数がめっきり減りました。商店街の客数は様々な要素に左右される難しい問題です。しかし、最近の人はあまり歩かないので、500mも歩くと一休みしたくなるという調査結果があります。車社会の中で、ある広さの面内に集めた多層構造の商店街と、伊勢佐木町のような直線的に長い商店街との、今後の展開に注目したいと思います。

以上

参考資料:

『横浜三街物語 - モトマチ・いせざき・西口』山口辰男著 (株)有隣堂刊